

## 《資料3》多変数関数の極値

$\mathbb{R}^n$  の領域  $D$  で定義された  $n$  変数関数  $f: D \rightarrow \mathbb{R}$  の極値について考える.

### 1 準備1 (多変数関数に対する Taylor の定理)

$f$  が  $\mathbf{a} \in D$  の近傍で  $C^N$  級ならば, Taylor の定理 (漸近展開形):

$$f(\mathbf{a} + \mathbf{h}) = \sum_{k=0}^N \frac{1}{k!} ((\mathbf{h} \cdot \nabla)^k f)(\mathbf{a}) + o(|\mathbf{h}|^N) \quad (\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0})$$

が成り立つ. ここで,

$$(\mathbf{h} \cdot \nabla)^k f = \left( \sum_{i=1}^n h_i \frac{\partial}{\partial x_i} \right)^k f = \sum_{i_1, \dots, i_k=1}^n \frac{\partial^k f}{\partial x_{i_1} \cdots \partial x_{i_k}} h_{i_1} \cdots h_{i_k}, \quad \nabla := \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x_1} \\ \vdots \\ \frac{\partial}{\partial x_n} \end{bmatrix} \quad (\text{nabla}).$$

この定理の  $N = 1, 2$  の場合は次のように書ける.

**補題1**  $\mathbf{a}$  の近傍で定義された関数  $f$  に対して,

- (i)  $f$  が  $\mathbf{a}$  の近傍で  $C^1$  級ならば,  $f(\mathbf{a} + \mathbf{h}) = f(\mathbf{a}) + f'(\mathbf{a})\mathbf{h} + o(|\mathbf{h}|)$  ( $\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}$ ).
- (ii)  $f$  が  $\mathbf{a}$  の近傍で  $C^2$  級ならば,  $f(\mathbf{a} + \mathbf{h}) = f(\mathbf{a}) + f'(\mathbf{a})\mathbf{h} + \frac{1}{2} f''(\mathbf{a})\mathbf{h} \cdot \mathbf{h} + o(|\mathbf{h}|^2)$  ( $\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}$ ).

ここで,

$$f'(\mathbf{a}) = (f_{x_1}(\mathbf{a}), \dots, f_{x_n}(\mathbf{a})), \quad f''(\mathbf{a}) = \left[ f_{x_i x_j}(\mathbf{a}) \right]_{\substack{1 \leq i \leq n \\ 1 \leq j \leq n}} \quad (\text{Hesse 行列}).$$

### 2 準備2 (対称行列と二次形式)

断らない限り, 行列・ベクトルの成分は“実数”であるとする.

**定義** 正方行列  $A$  が  $A^T = A$  ( $A^T$  は  $A$  の転置行列) を満たすとき,  $A$  を**対称行列**と呼ぶ ( $A\mathbf{x} \cdot \mathbf{y} = \mathbf{x} \cdot A\mathbf{y}$  が成り立つことに注意). また,  $n$  次対称行列  $A = [a_{ij}]$  に対して, **二次形式**

$$q_A(\mathbf{x}) := \mathbf{x}^T A \mathbf{x} = A\mathbf{x} \cdot \mathbf{x} = \sum_{i,j=1}^n a_{ij} x_i x_j = \sum_{i=1}^n a_{ii} x_i^2 + 2 \sum_{1 \leq i < j \leq n} a_{ij} x_i x_j \quad (\mathbf{x} = (x_i) \in \mathbb{R}^n)$$

が定義される (“実数”を明示するために, 実対称行列, 実二次形式と呼ぶことも多い). このとき, 更に,

- (i)  $A$  (or  $q_A$ ) が **正定値**  $\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} q_A(\mathbf{x}) > 0 \quad (\forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \setminus \{\mathbf{0}\})$ .
- (ii)  $A$  (or  $q_A$ ) が **負定値**  $\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} q_A(\mathbf{x}) < 0 \quad (\forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \setminus \{\mathbf{0}\})$ .
- (iii)  $A$  (or  $q_A$ ) が **不定値**  $\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} q_A(\mathbf{p}_1) > 0, q_A(\mathbf{p}_2) < 0$  となる  $\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2 \in \mathbb{R}^n$  が存在.

**補題2**  $n$  次対称行列  $A = [a_{ij}]$  に対して,

$$R A R^T = \begin{bmatrix} \mu_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \mu_n \end{bmatrix} \quad (\text{対角行列}) \quad (1)$$

となる正則行列  $R$  が存在する (有理的手続きで構成できる). このとき,  $\mu_1, \dots, \mu_n$  は  $R$  の選び方で変わるが,

$$r_+ := \#\{j \mid \mu_j > 0\}, \quad r_- := \#\{j \mid \mu_j < 0\}, \quad r_0 := \#\{j \mid \mu_j = 0\} \quad (\# \text{ は集合の元の個数を表す})$$

は  $R$  の選び方によらずに一意に定まる (ここまでの事実を **Sylvester の慣性法則**と呼ぶ). 更に,

- (i)  $A$  が正定値  $\Leftrightarrow r_+ = n$ .
- (ii)  $A$  が負定値  $\Leftrightarrow r_- = n$ .
- (iii)  $A$  が不定値  $\Leftrightarrow r_+ \cdot r_- \neq 0$ .

### 3 極値問題

補題 1, 2 を用いて, 多変数関数の極値問題に関する基本的な定理を証明する.

**定理 1**  $f$  が  $\mathbf{a} \in D$  の近傍で  $C^1$  級るとき,

$$f \text{ が } \mathbf{a} \text{ で極値をとる} \Rightarrow f'(\mathbf{a}) = \mathbf{0} \quad (\mathbf{a} \text{ は } f \text{ の停留点}).$$

**[証明]**  $f$  が  $\mathbf{a}$  で極値をとるなら, 各  $i$  について  $f(\mathbf{a} + te_i)$  も  $t = 0$  で極値をとる. よって,

$$f_{x_i}(\mathbf{a}) = \left( \frac{d}{dt} f(\mathbf{a} + te_i) \right)_{t=0} = 0 \quad (1 \leq i \leq n)$$

となるので,  $f'(\mathbf{a}) = (f_{x_1}(\mathbf{a}), \dots, f_{x_n}(\mathbf{a})) = \mathbf{0}$  が従う. □

**定理 2**  $f$  が  $\mathbf{a} \in D$  の近傍で  $C^2$  級で,  $\mathbf{a}$  が  $f$  の停留点であるとき,

- (i)  $f''(\mathbf{a})$  が正定値  $\Rightarrow \mathbf{a}$  は  $f$  の極小点 (すなわち,  $f$  は  $\mathbf{a}$  で極小値をとる).
- (ii)  $f''(\mathbf{a})$  が負定値  $\Rightarrow \mathbf{a}$  は  $f$  の極大点 (すなわち,  $f$  は  $\mathbf{a}$  で極大値をとる).
- (iii)  $f''(\mathbf{a})$  が不定値  $\Rightarrow \mathbf{a}$  は  $f$  の鞍点 (従って,  $f$  は  $\mathbf{a}$  で極値をとらない).

ここで,  $\mathbf{a}$  が  $f$  の鞍点とは,  $f$  がある方向で見れば  $\mathbf{a}$  で極小だが, 別の方向で見れば極大になることをいう.

**[証明]**  $\mathbf{a}$  が  $f$  の停留点であるから, 補題 1 (ii) により

$$f(\mathbf{a} + \mathbf{h}) - f(\mathbf{a}) = \frac{1}{2} f''(\mathbf{a}) \mathbf{h} \cdot \mathbf{h} + o(|\mathbf{h}|^2) \quad (\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}). \quad (2)$$

$f''(\mathbf{a})$  が正定値のとき  $f''(\mathbf{a}) \mathbf{h} \cdot \mathbf{h} \geq c |\mathbf{h}|^2$  ( $\exists c > 0$ ),  $f''(\mathbf{a})$  が負定値のとき  $f''(\mathbf{a}) \mathbf{h} \cdot \mathbf{h} \leq -c |\mathbf{h}|^2$  ( $\exists c > 0$ ) となるから, (i), (ii) が成り立つことは明らか. 次に,  $f''(\mathbf{a})$  に対して,  $f''(\mathbf{a}) \mathbf{h}_1 \cdot \mathbf{h}_1 > 0$ ,  $f''(\mathbf{a}) \mathbf{h}_2 \cdot \mathbf{h}_2 < 0$  なる  $\mathbf{h}_1, \mathbf{h}_2 \neq \mathbf{0}$  が存在するとき, (2) に  $\mathbf{h} = t\mathbf{h}_1, t\mathbf{h}_2$  を代入して,  $t \rightarrow 0$  での様子を見ることにより,

$$f(\mathbf{a} + t\mathbf{h}_1) - f(\mathbf{a}) > 0, \quad f(\mathbf{a} + t\mathbf{h}_2) - f(\mathbf{a}) < 0 \quad (0 < |t| \ll 1).$$

よって,  $f$  は  $\mathbf{a}$  において,  $\mathbf{h}_1$  方向には極小だが,  $\mathbf{h}_2$  方向には極大となる. これで (iii) も示された. □

$f''(\mathbf{a})$  が正定値, 負定値, 不定値となる条件は補題 2 で与えられる. 特に,  $n = 2$  の場合, その条件は簡単な形で表現される (4 例 1 参照).

**定理 3**  $f(x, y)$  が  $C^2$  級で,  $(a, b) \in D$  が  $f$  の停留点であるとき,

- (i)  $\det f''(a, b) > 0, f_{xx}(a, b) > 0 \Rightarrow f$  は  $(a, b)$  で極小値をとる.
- (ii)  $\det f''(a, b) > 0, f_{xx}(a, b) < 0 \Rightarrow f$  は  $(a, b)$  で極大値をとる.
- (iii)  $\det f''(a, b) < 0 \Rightarrow f$  は  $(a, b)$  で極値は取らない. (もっと詳しく,  $(a, b)$  は  $f$  の鞍点.)

### 4 対称行列に対する補足

ここでは, 補題 2 を証明し, 2 つの重要な例を挙げ, 最後に対称行列の直交行列による対角化にも言及する.

**[補題 2 の証明]** まず,  $n$  次対称行列  $A$  に対して, (1) の形を実現する正則行列  $R$  が存在することを,  $n$  に関する数学的帰納法で示す.  $n = 1$  のときは自明.  $n \geq 2$  のとき,  $n - 1$  次対称行列に対して主張が正しいと仮定して,  $n$  次対称行列でも主張が正しいことを示す. そのためには, 任意の  $n$  次対称行列  $A$  に対して,

$$R_0 A R_0^T = \begin{bmatrix} a_1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix} \quad (a_1 \in \mathbb{R}, A_1 \text{ は } n - 1 \text{ 次対称行列}) \quad (3)$$

の形となる  $n$  次正則行列  $R_0$  の存在を示せばよい. 実際,  $A_1$  は  $n-1$  次対称行列だから, 帰納法の仮定から,

$$R_1 A_1 R_1^T = \begin{bmatrix} a_2 & & O \\ & \ddots & \\ O & & a_n \end{bmatrix} \quad (a_2, \dots, a_n \in \mathbb{R})$$

の形となる  $n-1$  次正則行列  $R_1$  が存在する. よって,  $R = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1 \end{bmatrix} R_0$  とおけば,

$$R A R^T = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1 \end{bmatrix} R_0 A R_0^T \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1^T \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a_1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1^T \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_1 & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & R_1 A_1 R_1^T \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & a_n \end{bmatrix}$$

となり, 証明が終わる. (3) を実現する  $R_0$  の存在を示すために,  $i \neq j$  ( $1 \leq i, j \leq n$ ) に対し, 2 種類の行列

$$P_{ij} := (E_n \text{ の第 } i \text{ 行と第 } j \text{ 行を入れ換えた行列}), \\ P_{ij}(c) := (E_n \text{ の } (i, j) \text{ 成分の } 0 \text{ を } c \text{ で置き換えた行列})$$

を用意する. ここで,  $E_n$  は  $n$  次単位行列,  $P_{ij}$  は (左から掛けたとき) 第  $i$  行と第  $j$  行を交換する基本行列,  $P_{ij}(c)$  は第  $i$  行に第  $j$  行の  $c$  倍を加える基本行列である. 4 つの場合に分け,  $R_0$  の存在が構成的に示される.

Case 1.  $a_{11} \neq 0$  のとき,  $R_0 = P_{n1}(-\frac{a_{1n}}{a_{11}}) \cdots P_{21}(-\frac{a_{12}}{a_{11}})$  とおけば,  $R_0 A R_0^T = \begin{bmatrix} a_{11} & \mathbf{0}^T \\ \mathbf{0} & \exists A_1 \end{bmatrix}$ .

Case 2.  $a_{11} = 0$  かつ  $a_{ii} \neq 0$  ( $2 \leq i \leq n$ ) のとき,  $P_{1i} A P_{1i}^T$  の  $(1, 1)$  成分が  $a_{ii}$  となり, Case 1 に帰着.

Case 3.  $a_{11} = \cdots = a_{nn} = 0$  かつ  $a_{i1} \neq 0$  ( $2 \leq i \leq n$ ) のとき,  $P_{1i}(\frac{1}{2}) A P_{1i}(\frac{1}{2})^T$  の  $(1, 1)$  成分が  $a_{i1}$  となり, Case 1 に帰着.

Case 4.  $a_{11} = \cdots = a_{nn} = 0$  かつ  $a_{21} = \cdots = a_{n1} = 0$  のとき,  $R_0 = E$ ,  $a_1 = 0$  として (3) が成立.

以上の議論から, (1) の形を実現する正則行列  $R$  が有理的な手続きで構成されることが分かる (具体的には  $R$  は行基本変形の繰り返しを表す正則行列として得られる).

次に, 各  $\mathbf{x} = (x_i) \in \mathbb{R}^n \setminus \{\mathbf{0}\}$  に対して,  $\mathbf{x} = R^T \mathbf{y}$  ( $\Leftrightarrow \mathbf{y} = (y_i) = (R^T)^{-1} \mathbf{x} \neq \mathbf{0}$ ) とおけば,

$$A \mathbf{x} \cdot \mathbf{x} = A R^T \mathbf{y} \cdot R^T \mathbf{y} = R A R^T \mathbf{y} \cdot \mathbf{y} = \sum_{i=1}^n \mu_i y_i^2.$$

これより, (i), (ii), (iii) が容易に示される.

最後に,  $r_+, r_-, r_0$  の一意性を示す. (1) の各辺の左右からそれぞれ  $P_{ij}, P_{ij}^T$  (実は同じ行列) を掛ければ, 右辺において  $\mu_i$  と  $\mu_j$  が交換されるから (その際,  $r_+, r_-, r_0$  は変わらないことに注意),

$$\mu_1, \dots, \mu_{r_+} \text{ が正, } \mu_{r_++1}, \dots, \mu_{r_++r_-} \text{ が負, } \mu_{r_++r_-+1} = \cdots = \mu_n = 0 \quad (r_+ + r_- = n - r_0)$$

であると仮定して一般性を失わない. (1) の性質をもつ別の  $R'$  に対応する  $\mu'_1, \dots, \mu'_n$  が

$$\mu'_1, \dots, \mu'_{r'_+} \text{ が正, } \mu'_{r'_++1}, \dots, \mu'_{r'_++r'_-} \text{ が負, } \mu'_{r'_++r'_-+1} = \cdots = \mu'_n = 0 \quad (r'_+ + r'_- = n - r'_0)$$

を満たすとする. ここで,  $r_+ > r'_+$  であると仮定しよう (背理法でこれを否定する).  $R^T, R'^T$  の第  $i$  列を  $\mathbf{p}_i (= R^T \mathbf{e}_i)$ ,  $\mathbf{p}'_i (= R'^T \mathbf{e}_i)$  とし,  $V = \langle \mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_{r_+} \rangle$ ,  $W = \langle \mathbf{p}'_{r'_++1}, \dots, \mathbf{p}'_n \rangle$  とおく.  $\mathbf{q} \in V \cap W$  とすれば,

$$\mathbf{q} = \sum_{i=1}^{r_+} c_i \mathbf{p}_i = \sum_{i=r'_++1}^n d_i \mathbf{p}'_i \text{ の形に書かれ, } A \mathbf{q} \cdot \mathbf{q} = \sum_{i=1}^{r_+} \mu_i c_i^2 = \sum_{i=r'_++1}^{r'_++r'_-} \mu'_i d_i^2 \leq 0.$$

$\mathbf{q} \neq \mathbf{0}$  なら  $\sum_{i=1}^{r_+} \mu_i c_i^2 > 0$  となってしまうので,  $\mathbf{q} = \mathbf{0}$  でなければならない. よって,  $\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_{r_+}$ ,  $\mathbf{p}'_{r'_++1}, \dots, \mathbf{p}'_n$  は  $\mathbb{R}^n$  の 1 次独立なベクトルの組となるが, その個数が  $r_+ + (n - r'_+) = n + (r_+ - r'_+) > n$  となり不合理. 従って,  $r_+ > r'_+$  が否定され,  $r_+ \leq r'_+$  を得る.  $R$  と  $R'$  の役割を入れ替えて  $r_+ \geq r'_+$  が得られ,  $r_+ = r'_+$  が結論される. 同様な議論により  $r_- = r'_-$  も示され,  $r_+, r_-, r_0$  の一意性が証明された.  $\square$

**【問】**  $f(x, y, z) = x^2 + 4y^2 + 6z^2 + 4xy + 10yz + 6zx$  は極値をもつか?

(停留点  $(0, 0, 0)$  での Hesse 行列に対して上の手続きを実行すれば  $r_+ = 2, r_- = 1$  が得られるはず.)

以下では、 $RAR^T = B$  なる正則行列  $R$  が存在するとき  $A \cong B$  と表すことにする。

《例 1》 対称行列  $A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{bmatrix} \neq O$  に対する  $r_+, r_-, r_0$  を計算する ( $A = O$  は自明なので除く)。

- $a_{11} \neq 0$  のとき,  $A \cong \begin{bmatrix} a_{11} & 0 \\ 0 & a_{22} - a_{11}^{-1}a_{12}^2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{11} & 0 \\ 0 & a_{11}^{-1} \det A \end{bmatrix}$ .
- $a_{22} \neq 0$  のとき,  $A \cong \begin{bmatrix} a_{22} & a_{12} \\ a_{12} & a_{11} \end{bmatrix} \cong \begin{bmatrix} a_{22} & 0 \\ 0 & a_{11} - a_{22}^{-1}a_{12}^2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{22} & 0 \\ 0 & a_{22}^{-1} \det A \end{bmatrix}$ .
- $a_{11} = a_{22} = 0 \neq a_{12}$  のとき,  $A = \begin{bmatrix} 0 & a_{12} \\ a_{12} & 0 \end{bmatrix} \cong \begin{bmatrix} a_{12} & a_{12} \\ a_{12} & 0 \end{bmatrix} \cong \begin{bmatrix} a_{12} & 0 \\ 0 & -a_{12} \end{bmatrix}$ .

よって,  $\det A = a_{11}a_{22} - a_{12}^2$  の符号に注目して,

- $\det A > 0$  のとき,  $\begin{cases} a_{11} > 0 \ (\Leftrightarrow a_{22} > 0) \text{ ならば, } n_+ = 2 \text{ (正定値)}, \\ a_{11} < 0 \ (\Leftrightarrow a_{22} < 0) \text{ ならば, } n_- = 2 \text{ (負定値)}. \end{cases}$
- $\det A < 0$  のとき,  $n_+ = n_- = 1$  (不定値).
- $\det A = 0$  のとき,  $\begin{cases} a_{11} > 0 \text{ or } a_{22} > 0 \text{ ならば, } n_+ = n_0 = 1, \\ a_{11} < 0 \text{ or } a_{22} < 0 \text{ ならば, } n_- = n_0 = 1. \end{cases}$

《例 2》 対称行列  $A = [a_{ij}]_{\substack{1 \leq i \leq n \\ 1 \leq j \leq n}} (a_{ij} = a_{ji} \text{ に注意})$  に対して,  $A_k = [a_{ij}]_{\substack{1 \leq i \leq k \\ 1 \leq j \leq k}} (1 \leq k \leq n)$  とおくと,

(i)  $A$  が正定値  $\Leftrightarrow \det A_k > 0 (1 \leq \forall k \leq n)$ , (ii)  $A$  が負定値  $\Leftrightarrow (-1)^k \det A_k > 0 (1 \leq \forall k \leq n)$

が成り立つ. 実際,  $A$  が正定値のとき,  $\mathbf{x}^{(k)} = [x_i]_{1 \leq i \leq k} \in \mathbb{R}^k \setminus \{\mathbf{0}\} (1 \leq k \leq n)$  に対して,  $\tilde{\mathbf{x}}^{(k)} = \begin{bmatrix} \mathbf{x}^{(k)} \\ \mathbf{0} \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^n \setminus \{\mathbf{0}\}$  とおけば,  $A\tilde{\mathbf{x}}^{(k)} \cdot \tilde{\mathbf{x}}^{(k)} = A_k \mathbf{x}^{(k)} \cdot \mathbf{x}^{(k)} > 0$  より  $A_k$  も正定値となり,  $\det A_k > 0 (1 \leq \forall k \leq n)$  が従う ( $A$  が正定値のとき (1) の両辺の行列式をとってみよ). 逆に,  $\det A_k > 0 (1 \leq \forall k \leq n)$  のとき,

$$A = \begin{bmatrix} A_{n-1} & \mathbf{a}'_n \\ \mathbf{a}'_n{}^T & a_{nn} \end{bmatrix}, R_1 = \begin{bmatrix} E_{n-1} & \mathbf{0} \\ -\mathbf{a}'_n{}^T A_{n-1}^{-1} & 1 \end{bmatrix} \text{ と書いて, } R_1 A R_1^T = \begin{bmatrix} A_{n-1} & \mathbf{0} \\ \mathbf{0}^T & a_{nn} - A_{n-1}^{-1} \mathbf{a}'_n \cdot \mathbf{a}'_n \end{bmatrix}$$

であるから, 両辺の行列式をとり,  $\det A = \det A_{n-1} \cdot (a_{nn} - A_{n-1}^{-1} \mathbf{a}'_n \cdot \mathbf{a}'_n)$ . これより,

$$A \cong R_1 A R_1^T = \begin{bmatrix} A_{n-1} & \mathbf{0} \\ \mathbf{0}^T & \det A / \det A_{n-1} \end{bmatrix} \cong \dots \cong \begin{bmatrix} \det A_1 & & & O \\ & \det A_2 / \det A_1 & & \\ & & \ddots & \\ O & & & \det A_n / \det A_{n-1} \end{bmatrix}$$

となり  $r_+ = n$ . 従って,  $A$  は正定値である. (ii) は「 $A$  が負定値」と「 $-A$  が正定値」の同値性による.

**定義** 複素正方行列  $A$  に対して, (複素行列が現れるのはこの定義だけ)

- (i)  $A\mathbf{p} = \lambda\mathbf{p} (\Leftrightarrow (\lambda E - A)\mathbf{p} = \mathbf{0})$  を満たすスカラー  $\lambda \in \mathbb{C}$  およびベクトル  $\mathbf{p} \in \mathbb{C}^n \setminus \{\mathbf{0}\}$  が存在するとき,  $\lambda$  を  $A$  の**固有値**,  $\mathbf{p}$  を  $A$  の (固有値  $\lambda$  に対応する) **固有ベクトル** と呼ぶ.
- (ii) 多項式  $\varphi_A(\lambda) := \det(\lambda E - A)$  を  $A$  の**固有方程式**, 方程式  $\varphi_A(\lambda) = 0$  を  $A$  の**固有方程式** と呼ぶ.

**命題 1**  $A$  が  $n$  次対称行列のとき,  $\varphi_A(\lambda) = 0$  の解  $\lambda_1, \dots, \lambda_n (= A$  の固有値) はすべて実数で,

$$Q^T A Q = Q^{-1} A Q = \begin{bmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{bmatrix} \quad (4)$$

を満たす**直交行列**  $Q$  (すなわち,  $Q^T Q = E$  を満たす行列  $Q$ ) が存在する.

**命題 2**  $n$  次対称行列  $A$  に対して,

- (i)  $A$  が正定値  $\Leftrightarrow A$  のすべての固有値が正  $\Leftrightarrow r_+ = n$ .
- (ii)  $A$  が負定値  $\Leftrightarrow A$  のすべての固有値が負  $\Leftrightarrow r_- = n$ .
- (iii)  $A$  が不定値  $\Leftrightarrow A$  が正負の固有値をもつ  $\Leftrightarrow r_+ \cdot r_- \neq 0$ .

[注 1]  $A$  の固有値が求まるなら命題 1, 2 の方が簡潔だが,  $r_+, r_-, r_0$  を求めることが目的なら補題 2 の方が簡単で確実.

[注 2] (1) の  $RAR^T$  の  $R$  は  $A$  への行基本変形 (複数回) を表し, (4) の  $Q^T A Q$  の  $Q$  は  $A$  の固有ベクトルを並べて作られる.